022

After Century

Art Campus

Photography
Cinema
Fine Arts
Music
Literary Arts
Theatre
Broadcasting
Design

がんばろう ニッポン
いまこそひとつに ニッケイ

書＝野田慶人

被災された新入生在学生卒業生の皆様へ

このたびの東北地方太平洋沖地震により被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。観測史上最大の災禍ともいわれ、未だ予断を許さない状況の中、多くの人たちが深い哀しみと不安に包まれております。

わたしたちが最もつらく哀しいことは家族を失うことです。それは人間は弱く助け合わねば生きてはいけないからです。その生きる拠り所を失うからです。そして住み良い社会をつくるには、良いことや良き人間関係を構築し、後々につなげていかねばなりません。他者への思いやりもそうでしょうし、やさしさもそうでしょう。このような大災害に直面するとなおさら、その想いを強くします。

今回の災禍に対しまして日本大学芸術学部の教職員は、被災地やそれによって修学が困難になる人たちを、全力で支援します。教育の使命は人を育てることにあります。教育こそが未来を救い豊かにするからです。わたしたち教職員は日々そのように考えて学生たちと接しています。またそのことを強く念頭において、わたしたちは全エネルギーを日芸生全員に、とりわけ被災された新入生・在学生に注ぎます。学生たちも募金活動やボランティア活動をすでに実施しています。きっと悲しみを凌駕する新しい絆も生まれてくるでしょう。

現在、日本大学芸術学部では新たな情報収集に努めると共に、入学後の各種手続き、在学上の経済的援助など、あらゆる支援策を日本大学本部とともに検討し実行中です。申請方法などの相談窓口につきましても、順次準備を進めております。詳細は決定次第本学ウェブサイト・モバイルサイトにてお知らせしますので、どうか安心してお待ちください。日芸は、学生・教職員がひとつになってこの大きな困難を乗り越えるべくがんばります！

日本大学芸術学部長
野田　慶人

日本大学芸術学部では、地震に関する本学の情報をウェブサイト、及び、モバイルサイトにて掲載中です。随時、支援策や安全対策など、最新の情報を更新しておりますので、ご活用ください。

ウェブサイト：http://www.art.nihon-u.ac.jp/　モバイルサイト：http://nichigei.mobi/

「好き」を極める。

ただひたすらに、
好きな道を歩き続ける。
「好き」を極めた時、
そこに何かが見えてくるから。

「演じ手」から「創り手」へ。演劇人としての新たな挑戦。

演劇学科 演技コース 4年

須田雅子さん

■役者、そして舞台監督へ

“演じる”ことの魅力について問われれば、多くの役者たちが「違う自分になれるから」と答えるだろう。須田雅子も然り。「演技している時は自分じゃないから、普段の自分ではできないこともできる。それが楽しい」と彼女は言う。演劇学科の舞台総合実習の授業では、2年の時は袴を着た明治時代の女学生役、3年の前期は娼婦役で舞台に立った。「役作りは形から入るタイプ」と言うように、女学生役に決まった時は着物と袴を身につけ、風呂敷を手に自宅から大学まで1カ月間通い、娼婦役が決まった時は普段履かないピンヒールを履いて通学した。「私は普段、あまり自分を出さないし、度胸もない。でも演技という後ろ盾があると何でもできる。不思議と人の目も気にならなくなるんです」。
それほどまでに演ずることにのめり込んでいた須田だったが、彼女は今、舞台監督になるために『さいたま芸術劇場』の演出部での仕事に励んでいる。“演じ手”から“創り手”へと転向したその裏には、一体何があったのだろうか。

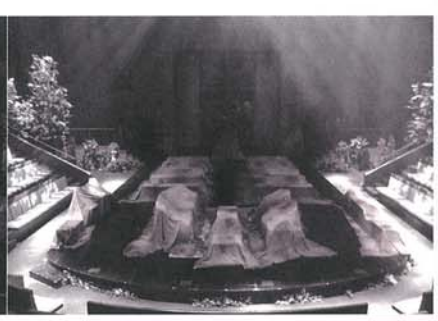
舞台総合実習で娼婦役を熱演。もう役者として舞台に立つことはないかもしれないが、役者としての経験は今に生きている。

■役者とスタッフの橋渡し役として

舞台総合芸術の授業で上演された舞台『スペース・ターミナル・ケア』。2年後期に行われたこの舞台に際し、須田は役者のオーディションを受けたが結果的には役者としてではなく、舞台監督として参加することになった。高校時代は演劇部で舞台監督を務めたことはあったが、大学に入ってからは役者一筋。当初はとまどいもあったが、須田はあることに気付いたと言う。「舞台監督の役割は作品全体を見て、人をまとめること。小学校の頃に学級委員をやっていたせいか、自分は人をまとめる仕事が好きだったと改めて実感しました」。
役者経験もある須田は舞台監督をする上で一つの目標を立てた。それは、役者と彼女と同じく舞台監督を務める3人の間の橋渡し役として、双方が気持ちよく作品創りができるように心を配るということ。もともと生真面目な性格の彼女は出来る限りの力を尽くして舞台監督としての役割を遂行し、役者とスタッフの間に何のトラブルもなく一つの作品を創り上げることができた。
舞台監督としての仕事ぶりが評価されたのだろう。『スペース・ターミナル・ケア』の舞台が幕を閉じた後、舞台監督の山田潤一先生に『さいたま芸術劇場』での仕事を紹介され、“創り手”としての道を歩くことになった。

■自分の居場所は演劇の中にある

『さいたま芸術劇場』は、演出家である蜷川幸雄氏の作品を数多く手がけることでも知られている。舞台監督をサポートする演出部に所属する須田は、これまで蜷川氏演出の舞台『ヘンリー6世』、蜷川氏率いる素人の演劇集団ゴールドシアターの『聖地』などに関わり、一流のスタッフ、役者陣とともに作品創りに参加。商業演劇に携わる一方で、昨年は洋舞コースの踊りの卒業制作で舞台監督を務めるなど大学の活動も積極的に行っている。「役者経験があるから、演じる側の気持ちもわかる。舞台監督を目指す上で、それが私の強みだと思っています」。
役者として舞台に立っていた彼女は、舞台監督という仕事に魅せられ、現在は役者を支える自らの役割に喜びを見いだすまでになった。「舞台に携わる機会にも恵まれたし、人にも環境にも恵まれてすごくラッキーでした。それだけに、これから頑張らなければと思っています」。
袴を身につけ、ピンヒールを履いて通学する須田の姿は、もうどこにもない。しかし彼女はこれからも演劇という日常を離れた異空間で、舞台監督というもう一人の自分を探究し続ける。



◀蜷川幸雄氏が率いる演劇集団『ゴールドシアター』の舞台「聖地」では、演出部スタッフの一人として舞台創りに参加。時には小道具の制作を手がけるなど仕事は多種多様である。

「記録」から「表現」へ。新しい鉄道写真を求めて。

写真学科 4年

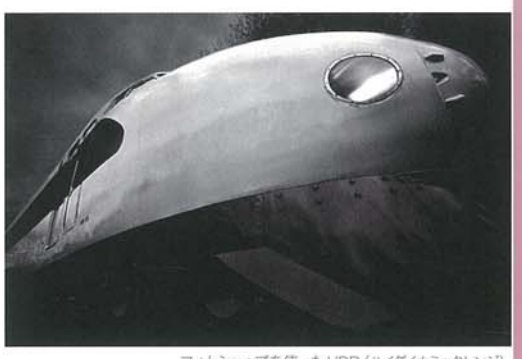
遠藤真人さん

■写真は鉄道を表現する一つの手法だった

遠藤真人にとっての原風景。それは保育園の帰り道、おじいちゃんと一緒に見た貨物列車である。轟音をたてながら走り抜ける貨物列車は、彼の憧れでありヒーローでもあった。幼い頃に抱いた鉄道への思いは途切れることなく、むしろますます強くなった。鉄道好きな多くの少年と同じように、彼もまた電車の駅名板や通勤電車のライトなどのコレクションに夢中になり、カメラを手に記録写真を撮り続けた。もはや鉄道のない生活は考えられないほど、遠藤は鉄道にのめり込んでいた。
鉄道好きな遠藤が、なぜ日芸の写真学科に入学したのか。「大好きな鉄道をどう表現すればいいか、ずっと考えていました。その答えがたまたま写真だった」と彼は言う。きっかけは高校時代。60年ほど前から鉄道写真を撮り続けている広田尚敬氏の作品との出会いである。「アマチュアの鉄道ファンが撮る写真は、ほとんどが記録写真です。それに対して広田氏の作品には、新たな鉄道表現がありました。こんな写真を撮って、鉄道の新しい魅力を伝えたいと思ったんです」。進学校の理科系に在籍していた彼は一転、文科系に転籍し日芸を目指すこととなった。「記録」から「表現」へ――。遠藤は写真という手法を通して、今まで誰も手がけたことのない鉄道表現を探究したいと考えたのだ。

■鉄道写真の可能性を広げる

写真での新しい鉄道表現をするためには、当然のことながら鉄道の知識と写真技術が不可欠である。鉄道への造詣の深い遠藤に足りないものは、被写体のイメージをかたちにする写真技術と理論だった。「大学で学んだ写真の知識や技術をそのまま使って、外で鉄道写真を撮って自分のこやしにすることができる。それが写真学科に入ったいちばんの収穫でしたね」。
大学に入ってからも遠藤の被写体はほとんどが鉄道。「僕の場合は被写体が絞られているので、それをどう料理するかに専念します。それだけに被写体のイメージを一度リセットしないと、新しい表現は生まれない。そこに難しさとおもしろさを感じます」。被写体を料理すべく、遠藤はこれまでさまざまな鉄道表現に挑戦してきた。その一つが、鉄道写真に御法度と言われてきたフォトショップを使ったHDR（ハイダイナミックレンジ）合成。HDRは写真合成により人間の視覚に最も近い画像を創ることができる手法で、遠藤はその手法を用いて空と列車の部分部分をそれぞれに撮影し、4枚の写真を合成して一つの作品を完成させた。今までの鉄道写真を乗り越える。遠藤はそこに、新しい鉄道の表現方法を見いだしたのである。

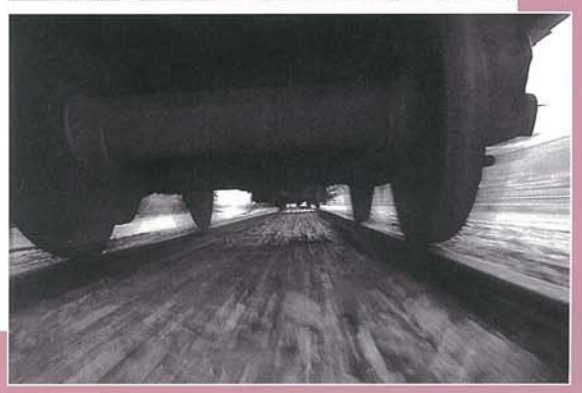


フォトショップを使ったHDR（ハイダイナミックレンジ）合成を使用し、鉄道写真の新しい可能性を探究。

■祖父からもらった初めての及第点

「自分が抱いているイメージに近い鉄道の自己表現が出来るようになってきたせいか、コンテストや雑誌に投稿して鉄道の魅力を多くの人に伝えたいという思いが強くなりました」。株式会社タムロンが主催した“第二回私の好きな鉄道写真ベストショット”では、審査員特別賞を受賞。さらに秩父鉄道が公募した蒸気機関車の写真はポスターに採用され、鉄道ファンの目を楽しませた。“第二回私の好きな鉄道写真ベストショット”に応募した作品のタイトルは「光流」。新幹線の速さを表現するために12月の寒空の下、4時間かけて300カットを撮影。その中から選んだ会心の作品である。
「小学生の頃から撮った写真はすべて祖父に見せています。祖父にとっての及第点は70点なのですが、どの写真を見ても“68点！”という答えが返ってきました。ところが「光流」を見せた時、初めて70点をもらえたんですよ。写真を続けてきて良かったと心から思いました」。おじいちゃんに手を引かれ、時間を忘れて見ていた蒸気機関車。あの時に見た蒸気機関車のように、遠藤はまっすぐに鉄道という一本のレールを走ってきた。終着駅はまだ見えないが、その先に新しい鉄道表現が必ずあることを信じて。

▶「光流」
株式会社タムロン主催「第二回私の好きな鉄道写真ベストショット」で審査員特別賞を受賞。おじいちゃんに及第点をもらった記念すべき作品でもある。



▶「床下走景」
スローシャッターで撮影しながら、レンズをズームさせ、さらにカメラ本体を動かすことにより、停止している被写体に躍動感が生まれた。

第5回日藝賞は、青山剛昌氏と林真理子氏に決定!

NICHI AWARD FOR

第5回 日藝

日藝賞とは、芸術学部に在籍していた人で、著しく日藝の名声を高め、その業績が社会に貢献し、芸術を志す学生の夢の対象となる人に贈られます。第5回日藝賞は、2010年11月8日から26日まで、学生、専任教職員、芸術学部校友会役員の投票により選出された候補者の中から、日藝賞選考委員

Mariko Hayashi

日本大学芸術学部文芸学科(昭和50年度卒業)　小説家

【著書】

ルンルンを買っておうちに帰ろう(1982年)
星影のステラ(1985年)
最終便に間に合えば(1985年)
ミカドの淑女(1990年)
白蓮れんれん(1994年)
素晴らしき家族旅行(1994年)
女文士(1995年)
幸福御礼(1996年)
不機嫌な果実(1996年)
着物をめぐる物語(1997年)
みんなの秘密(1997年)
死ぬほど好き(2000年)
花探し(2000年)
ミスキャスト(2000年)
初夜(2002年)
花(2002年)
20代に読みたい名作(2002年)
聖家族のランチ(2002年)
年下の女友だち(2003年)
anego(2003年)
ミルキー(2004年)
野ばら(2004年)
知りたがりやの猫(2004年)
アッコちゃんの時代(2005年)
ウーマンズ・アイランド(2006年)
秋の森の奇跡(2006年)
グラビアの夜(2007年)
「綺麗な人」と言われるようになったのは、四十歳を過ぎてからでした(2007年)
RURIKO(2008年)
生き方名言新書1 林真理子(2008年)
もっと塩味を!(2008年)
美は惜しみなく奪う(2009年)
私のこと、好きだった?(2009年)
下流の宴(2010年)
いいんだか悪いんだか(2010年)
六条御息所 源氏がたり(2010年)
本朝金瓶梅 西国漫遊篇(2010年)
秘密のスイーツ(2010年)
ほか多数

【受賞歴】

第94回 直木賞受賞
《最終便に間に合えば/京都まで》(1986年)
第8回 柴田錬三郎賞受賞
《白蓮れんれん》(1995年)
第32回 吉川英治文学賞受賞
《みんなの秘密》(1998年)
レジオン・ドヌール勲章シュヴァリエ受賞(2011年)

【その他】

直木賞、講談社エッセイ賞、吉川英治文学賞、中央公論文芸賞、毎日出版文化賞等の各選考委員賞

林真理子

青山剛昌

★ I ★ G ★ E ★ I ★
EXCELLENCE

授賞式

会で業績などを検討の結果、青山剛昌氏(昭和60年度美術学科卒業・漫画家)と林真理子氏(昭和50年度文芸学科卒業・小説家)に決定しました。授賞式は2011年4月8日の入学歓迎式の中で行われ、2名の受賞者にはそれぞれ賞金とバカラクリスタルの記念トロフィーが授与されます。

【歴代受賞者】

第1回 三谷幸喜(脚本家)
佐藤隆太(俳優)

第2回 大石芳野(ドキュメンタリー写真家)
爆笑問題(太田光、田中裕二/タレント)

第3回 宮藤官九郎(脚本家)
真田広之(俳優)

第4回 宮嶋茂樹(報道カメラマン)
市川團十郎(歌舞伎俳優)

Gōshō Aoyama

日本大学芸術学部美術学科(昭和60年度卒業) 漫画家

【コミックス】

まじっく快斗(1988年〜)——4巻(2009年現在・不定期連載中)
YAIBA(1989年〜1994年)——全24巻
青山剛昌短編集——全1巻
4番サード
探偵ジョージのミニミニ大作戦
ちょっとまってて
プレイ イット アゲイン(YAIBAの原型)
えくすかりばあ(4番サードの原型)
夏のサンタクロース
サンデー 19show さまよえる赤い蝶(ショートショート作品)
さりげなくルパン(まじっく快斗のモデル)
名探偵コナン(1994年〜)——70巻(2010年12月現在・連載中)
4番サード——全1巻
YAIBA 新装版——全24巻

【映像化作品】

◉TVアニメ
剣勇伝説YAIBA(1993年〜1994年)
名探偵コナン(1996年〜)

◉名探偵コナン・劇場版
第1作 時計じかけの摩天楼(1997年)
第2作 14番目の標的(1998年)
第3作 世紀末の魔術師(1999年)
第4作 瞳の中の暗殺者(2000年)
第5作 天国へのカウントダウン(2001年)
第6作 ベイカー街の亡霊(2002年)
第7作 迷宮の十字路(2003年)
第8作 銀翼の奇術師(2004年)
第9作 水平線上の陰謀(2005年)
第10作 探偵たちの鎮魂歌(2006年)
第11作 紺碧の棺(2007年)
第12作 戦慄の楽譜(2008年)
第13作 漆黒の追跡者(2009年)
第14作 天空の難破船(2010年)
第15作 沈黙の15分(2011年4月16日公開予定)

【受賞歴】

第19回 小学館新人コミック大賞入選《ちょっとまってて》(1986年)
第38回 小学館漫画賞(児童部門)受賞《YAIBA》(1993年)
第46回 小学館漫画賞(少年部門)受賞《名探偵コナン》(2001年)

※その他に「名探偵コナン」の小説版、テレビドラマ版、ゲーム等多数

SEISHUNの君たちへ

「3.11」に「新校舎」を想う

野田慶人 ○日本大学芸術学部長 教授

2011年3月11日は、日本にとって、日本人にとって、日芸にとって、学生にとって、教職員にとって、そして私にとって一生忘れられない日となった。
この日は、一般入学試験二期の最後となる放送学科の二次試験が行われていた。
1名の欠席はあったものの、午前中には小論文試験も無事終了、午後1時半からの面接試験も何事もなく終わろうとするその瞬間、「2時46分!」大きな衝撃が走った。地震計測が可能となって以来のマグニチュード9.0という「巨大地震」に遭遇したのだ。震源地は宮城県沖とは言え、東京も「震度5強!!」今まで体験したことのない大きな、複雑な揺れが、5、6分は続いたように思う。皆、夢遊病者のように1階に降り、中庭に集合していた。そこには、各棟、各学科から200名程が集まっていた。ハッと我にかえり、学部長として、学部の総責任者として、幹部教職員や守衛さんと被害状況の把握、今後の対応を速やかに検討した。状況把握にかかった時間は30分余り。結果は、人的災害ゼロ、西棟外壁に2カ所クラックが有り、図書館の本が散乱するという驚く程軽微なものであった。
ふと見渡すと、そこには何もなかったかのように、昨年8月に完成した「新校舎」が頼もしげに悠然と立っていた。
私はこの「新校舎」に一礼をしていた。そして、先見の明あってこの「新校舎」を企画された八木元学部長、着手された一ノ瀬前学部長に心中深く敬意を表し、厚く感謝申し上げた。もしあの旧校舎だったら、仮校舎だったら、工事中だったら…と想うだけでゾッとする。本当に本当に「新校舎」ありがとう!もちろん、日芸自慢の教職員および学生のチームワークの良さ、そして守衛さん、近隣の方々の協力があってこそ…は云うまでもない。全てにありがとう!! 全てに深く深く感謝する次第である。
この地球異変とも想える避けようもない天災、まだまだ警戒が必要だが、慎重に冷静に対応し、皆で力を合わせて負けずにめげずに粘り強く頑張るしかない。頑張りましょう!!

学生皆さんへのエール

下川太一
○デザイン学科 平成12年卒

確信を求めて、学生の日々を過ごしていた。当時の江古田キャンパスは、四周ぐるりと高さ2mを超える閉鎖的な塀で囲われていたにも関わらず、飲み屋の焼き鳥の匂いがその塀を越えて薫り、午前の陽光よりも夕焼けが良く似合う江古田の町に馴染んだシンボルとして、何やら是非善悪煮詰まったような独特の雰囲気を醸し出していた。映画・放送はコンテを練り上げ制作へ、演劇・音楽は自身の体や楽器を用いて旋律とし、写真・文芸・美術はモチーフから創造を導き出し、それぞれが求める表現を深めていくように私の目には映っていた。しかし、建築デザインを志す者はそれが出来ない。学生が建築の実作にチャレンジする機会など無く、課題制作をしてもドローイングや模型であって、イメージした空間に触れる事が出来ない。手がかりとなるものがさっぱりと解らず、目標となる輪郭を掴めずに、もがきながら制作に向かっていた。ただ芸術に全身で向き合う者ならば、分野を問わず、その思い悩む日々には変わりが無かったのだとも思っている。そんな様々な芸術分野の連中が集まっている、それが日藝の記憶であり、キャンパスの内外を問わず動き、もがき苦しんだ日々の後に素晴らしい人達との出会いと経験に恵まれた。
私の卒業年も就職氷河期であったが、昨今のそれはアジア圏を含めた経済情勢の変化を受け益々過酷であると察する。しかし、そんな時だからこそチャンスをしっかりと掴んで頂きたい。それは創造する意思を持った才能のエネルギーとなり、社会にきらめく一筋の光となる可能性につながる。私の学生当時まだ一般的ではなかった「クリエイティブ産業」と呼ばれる分野が日藝にはとっくのとうに集結していて、ピークアウトを迎えた社会に対し、今はその価値を存分に発揮する機会でもある。
価値観の多様化が進み、情報技術の進展により個人と社会との繋がり方は大きく変化し、少子高齢化や所得格差、経済の先行き不安等、折り重なり感じる漠然とした閉塞感は、既成の価値観を捉え直すことから、新たな解決へ向かうと信じる。根源的で創造的な思考をすること。心から正しいと思える判断力を身につけ、その判断を常に反省すること。真摯かつ実践的であり、謙虚で明るい心を持ち続ける事が大切。どうやってブレイクスルーするのかは、日々継続した努力の果てにしか見えてこない。自身それを目指して取り組む所であり、同時に学生皆さんへのエールとさせて頂く。
最後に、東日本を襲った震災は広大な範囲で何よりも大切な命と心とを奪い去った。今、我々が出来る事は被災した方々を物資・精神の両面で支えること。そして、この国みんなで思いやりを持って明るく朗らかに、ひとりひとりが目の前の事を頑張り抜く事なのだと思う。

写真は設計及び現場を担当した
神奈川芸術劇場・NHK横浜放送会館

神奈川芸術劇場 http://www.kaat.jp/
NHK横浜新放送会館 http://www.nhk.or.jp/yokohama/new-station/

道楽と職業のはざま

櫻井 歓 ○一般教育 准教授

夏目漱石は、明治44年(1911年)に「道楽と職業」というタイトルで講演を行っている。力(りき)みのない語り口に乗せて語られる漱石の批評は、この講演でも冴えていて、いま読んでも考えさせられる点が多い。例えば、大学を出ても糊口の口が見つからない秀才のいることを念頭に置いて、大学に職業学という講座を設けてはどうかと考案したり、文明の開化とともに職業の数は増えて職業は細分化される──分業化が進む──のにともない、各自の本業以外のことに無知になる傾向があるため、そうした壁をこえて人々が相互に結びつくために、人間に共通のことを描き出した文学書を読むことを勧めたりしている。
だが、何より印象的なのは、タイトルにもある道楽と職業とのせめぎ合い、その緊張関係のとらえ方である。漱石によれば、職業とは「人のため」にするものであり、「他人本位」である。ただし、人のためとは、人のご機嫌を取ればいいというくらいの卑俗な意味であり、人の欲することを行って報酬を得るという程度のことにすぎない(この点、彼の職業観は大変ドライである)。しかし一方、どうしても他人本位では成り立たない職業があるという。それがすなわち、科学者、哲学者、芸術家と呼ばれるものに他ならない。「道楽本位」ともいわれる彼らは、「己のため」つまり自分の気持ちに誠実に、実験や思索や制作に耽るため、物質的報酬には恵まれていない。しかし、科学者、哲学者、芸術家は「自己本位」でなければとうてい成功しないという。なぜなら、彼らがもっぱら世間のご機嫌を取るような仕事をするならば、己というものがなくなってしまうからである。漱石自身、文学を職業としながら、それは己のためにする結果が偶然人のためになって報酬を得ているのだとして、「道楽的職業」というような変種のあることを述べて講演を締めくくっている。
この講演は、作家としての漱石の倫理性をさえ感じさせるものである。私は、芸術学部生の諸君にエールを送るつもりで、この職業論を紹介したい。それぞれの専門分野での表現を追求したいという意欲に燃えてこの学部にやってきた諸君は、すでに漱石のいう「芸術家」の道に踏み出しているのかも知れない。いわば、道楽と職業のはざまにあって、他人本位の求められる社会と何とか折り合いを付けながら、それでも自己表現の熱情(パトス)を失わずに表現を追求し続けること──、そんな諸君の試行錯誤を応援したいと思っている。

ちょっとしたこと

小澤輝雄 ○所沢校舎事務長

世界三大料理の筆頭といえばやはり中華(中国)料理であると思う。私は中華(中国)料理が比較的好きなので、仲間を誘っては東所沢のある「菜館」にせっせと通っている。味よし・値段は手頃でありかつボリュームたっぷりであるため、いつも突き出たお腹をさすりながら店を出ることになる。
中国は自他共に認める食いしん坊のお国柄であるため、食べ物に関する故事・逸話も多く、大変興味深いものがある。故事を一つあげる。
春秋戦国時代の宋という国に名宰相の華元がいた。ある時、隣国の軍が侵入してきたので、華元自らが軍の将となり迎え撃つことになった。宋軍は圧倒的有利に布陣することができ、明日の勝利を確信できた。それで、華元は将兵に羊の肉を振る舞うことにした。ただ、華元の兵車の御者である羊斟には羊の肉を食べさせないよう命じた。不吉と思ったからである。翌朝、戦いの火蓋がまさに切られようとする時、突然華元の兵車は敵陣に向かって走り出した。敵・味方双方が唖然と見守るなか、兵車はとうとう敵の本陣に着いてしまい、華元は捕虜となってしまった。羊斟が、羊の肉を食べさせてもらえなかったことを恨み、華元を敵陣に届けてしまったのである。結果、将を失い動揺した宋軍は惨敗してしまった。教訓「食べ物の恨みは恐ろしい」。
この教訓は古から言われているので、その通りと首肯するしかない。しかし、この故事の教訓は、更に次のように捉えたい。「ちょっとした、心づかい・説明不足が、大きな災厄を招くことがある」。華元がちょっとした心づかいを羊斟にしていれば、惨敗という結果は招かなかったであろう。それゆえか、後日帰国した華元は、羊斟を咎めることはしなかったという。
人は思わぬことで、誤解をされ、恨みを買うことがある。それを避けるには「ちょっとしたこと」の努力を重ねることが大切であると思う。また、「ちょっとしたこと」が人を幸福な気分にすることも多いのである。

雑誌『ダ・ヴィンチ3月号』に デザイン学科講師茂出木龍太先生と 3年京野朗子さんが掲載!

雑誌『ダ・ヴィンチ3月号』の特集「現役デザイナーに聞くデザイナーになる方法」に、『VAIO ASSIST TORCH PROJECT』や『郵便年賀.jp』などを手掛けるアートディレクターでデザイン学科講師の茂出木龍太先生が紹介された。また同誌の特集「大学でデザインを学ぼう!」では、昨年12月に江古田校舎で開催されたコミュニケーションデザイン展「knock!」の実行委員長を務めた京野朗子さん（デザイン学科3年）のインタビューも掲載されている。この展覧会は地域密着型で、学外の人々に広く参加していただくワークショップも多数企画され、同特集では茂出木先生とのコラボレーションで実施したワークショップ並びにその成果を上映したナイト・プロジェクションの様子が取り上げられた。

江古田校舎にて ファイアーフェスティバル2011 in 練馬開催!!!

3月1日（火）～7日（月）の全国火災予防運動に先立ち、2月28日（月）に江古田キャンパスにおいて「ファイアーフェスティバル2011 in 練馬」が開催され、テレビキャスターの草野仁さんが1日消防署長として来校し、大規模な消防演習が実施された。

演習では、梯子車や大型放水車などの消防自動車が集結し、雨天という天候にも関わらず、多くの見学者を集め、災害時さながらの緊迫感で演習が実施された。

演習後、中ホールにて草野仁さんによる防災講話が行われ、江戸時代の消防活動の歴史や、日頃からの防火防災の心得など、多彩な視点からの談話に多くの観客が感銘を受けた。

奇しくもこの演習が行われた12日後、未曽有の大災害「東北地方太平洋沖地震」が発生し、芸術学部でも大規模な全館避難や、夜間の帰宅難民を出すこととなった。幸い人的被害や建物・施設に被害はなかったものの、多くの学生・教職員が災害は時と場面を選ばず発生することを痛感した。そういった観点からも「ファイアーフェスティバル」を芸術学部で開催できたことは、官民学相互防災意識を高める意味で大きな収穫となった。

受賞者一覧

去る3月25日に平成22年度学位記授与式が挙行されました。日本大学総長賞・優秀賞・優等賞、芸術学部長賞、芸術学部奨励賞など卒業生、大学院修了生に対する各賞の発表及び表彰がありましたので、学外のコンテストなどで活躍された受賞者と併せてお知らせいたします。

◉日本大学総長賞

○ 学業部門

田中美帆（映画）

○ 学術・文化部門

木原浩太（演劇）

◉日本大学優秀賞（学術・文化部門）

深澤直子、長谷川香織、北山ちぐさ（以上デザイン）

◉日本大学優等賞（学業部門）

中島ゆう子、大野深美、河野香織、中島明菜（以上写真）
田中美帆、川口美樹、植田郁子、岡田洋奈（以上映画）
酒井みのり、勝又秀美、古澤伸二、眞間 悠（以上美術）
横川千秋、西 彩乃、下山絵吏、中村聡美（以上音楽）
砂山紗矢佳、花田早耶佳、佐滝 忍、小黒貴之（以上文芸）
伊藤百友加、ブリドカットセーラ恵美、寺本綾乃、伊藤ちさと（以上演劇）
大内 健、髙田悠人、小林将大、橋本佳奈（以上放送）
島田 薫、山本莉紗、居山 翠、齋藤成美（以上デザイン）

◉日本大学奨励賞（学術・文化部門）

御永真幸（文芸3年）
清水恭子、正田冴佳、門馬聖龍（以上デザイン3年）

◉芸術学部長賞

○ 学業部門

安東沙希、佐々木 龍、中津川瑛奈、柳岡創平、章 岱（以上写真）
田中美帆、和田 彩、芳賀 俊、清水里子、李 瑛恩（以上映画）
金勝由佳、石田浩美、岡田祐介、川越亜優美、中井伸太朗（以上美術）
佐々木正暁、青木友花、原 久美子、臼田克巳、下山絵吏（以上音楽）
小黒貴之、儀保佑輔、佐滝 忍、桒嶋岳大、佐藤豪晃（以上文芸）
田路紅瑠美、齊藤千華、岡田奈津実、岡田麻里、寺本綾乃（以上演劇）
杉田亜矢、岡部菜穂子、江良総司、髙田悠人、佐久間愛生（以上放送）
落合亜希レオノール、島田 薫、古川大地、飯塚 啓、金 鍾潤（以上デザイン）

○ その他の部門

大森拓弥（美術）、瀬戸口将史（放送）

◉芸術学部奨励賞

林 珍元（写真）、神谷実里（映画）、酒井みのり（美術）、齋藤優輝（音楽）、福田浩子（文芸）、齋藤睦未（演劇）、南部 望（放送）、佐藤 樹（デザイン）

◉芸術学部金丸重嶺賞

三井春樹、今給黎香里、森田佳奈（以上写真）

◉芸術学部渡辺俊平記念賞

柏木浩輔（映画）

◉芸術学部呉正恭賞（特別賞）

安田拓矢（放送）

◉芸術学部川野希典賞

篠原和伸、勝田真以（以上演劇）

◉芸術学部筈見有弘賞

竹島尚史（映画）

◉芸術学部大竹徹賞

嘉戸雄太（映画）

◉芸術学部八木信忠賞

中島裕介（映画）

◉芸術学部湯川制賞

丹後 彩（文芸学）、藤田純一（映像芸術）、劉 栄（造形芸術）、林 智草（音楽芸術）、大川珠季（舞台芸術）

◉芸術学部澤本徳美賞

築城厚三（文芸学）、鳥海早喜（映像芸術）、林 志泳（造形芸術）、佐藤 結（音楽芸術）、村松真衣（舞台芸術）

◉生産工学部賞

大山智子（造形芸術）、片岡はるな（美術）

◉文理学部長賞

横手美千子（美術）

◉平成24年度「日本大学進学ガイド」

○ 表紙デザインの部

入選　大石茉里奈（デザイン3年）
佳作　今 なつき、黒岩武史（同2年）
特別賞（学務部長賞）　中川美沙（同2年）

○ メイン写真の部

入選　池田侑紀子（写真1年）
佳作　長谷川怜実、鈴木裕季奈（同1年）
特別賞（学務部長賞）　久保慶多（同1年）

◉写真学科卒展2011

○ 新写真派協会賞

安東沙希（写真）

○ 写真学科奨励賞

菅野 綾、北川真利、鈴木惇一郎（以上写真）

◉映画学科奨励賞

原 香織、竹内隆志、阿蘇品 文、鈴木 祥、三村公佑、久保晴花、玉島吉茶（以上映画）

◉映画学科選奨

佐倉佳央理、三浦 渉、仲原達彦、西田友香、末松祐紀、八方麻実、松尾 拓（以上映画）

◉映画学科特別賞

五十嵐小保理、細村舞衣、河原木 咲、八木順一朗、伊丸岡 創、河野梨沙、中山卓也（以上映画）

◉アートライティング賞

森 想来（映画）、村田圭佑（映画3年）

◉映画学科コダック賞

巻田勇輔、山田来美、鈴木 聡、石井佑典、酒井麻衣、千代將太、島田茉里奈（以上映画）、植苗義貴、武田浩明、荒木宏美、秋戸香澄、駒井温子、浅川和之、田口綾乃（以上映画3年）

◉江戸クリエート賞

黒田竜太郎、和田健太郎、遠藤沙紀（以上映画3年）

◉第2回小倉けいりん イメージアップポスターデザイン

佳作　菅沼竜矢（デザイン）

◉第2回JPCAデザインアワード

グランプリ　深澤直子（デザイン）、準グランプリ　門馬聖龍（デザイン3年）、優秀賞　田村有斗（デザイン）

◉2009年版画フォーラム和紙の里ひがしちちぶ展

大野クリニック奨励賞　内田菜々子（デザイン）
ギャラリー美輝奨励賞　熊田綾菜（デザイン）

◉J:COMカー外装デザイン

デザイン案採択　髙森奈央子（デザイン）

◉プロと卵のエコデザイン展2010

奨励賞　片貝実鈴、二階堂翔太、藤原周平（デザイン3年）

◉子ども虐待防止オレンジリボン運動「公式ポスターコンテスト2010」

（公財）SBI子ども希望財団賞　江野真梨絵（デザイン3年）

◉第23回ACC学生CMコンクール

テレビCM部門　大賞　清水恭子（デザイン3年）
金賞　正田冴佳（デザイン3年）

◉大阪市主催「人権啓発ポスターデザイン・キャッチコピー」

キャッチコピー部門　優秀賞　小林大介（デザイン3年）

◉財団法人東京都島しょ振興公社主催「第3回伊豆諸島・小笠原諸島観光ポスターデザインコンテスト」

佳作　中川美沙（デザイン2年）

◉第10回住宅課題賞

入選　中川照博（デザイン3年）

以上（学年は22年度のもの／学年表記のないものは今春の卒業生）

写真学科

◉平成22年度 日本大学芸術学部写真学科 卒業制作展

毎年恒例の写真学科卒業制作展が、本年は江古田校舎芸術資料館において2月18日～3月5日まで開催されました。初日には会場でオープニングレセプションも開催され、出展作品の中から下記の優秀作品が選ばれました。

○新写真派協会賞
安東沙希「惑星」
○写真学科奨励賞
菅野 綾「時間（とき）」
北川真利「SINK」
鈴木惇一郎「非日用品」

◉日本大学芸術学部写真学科・学生選抜展

平成22年度の卒業制作の中から選抜された下記作品の大型プリントが、品川のキヤノンSタワー 2F・オープンギャラリーで2月19日～3月11日まで展示されました。

大野深美「生まれてきてくれてありがとう」
中島ゆう子「蓮花」
中津川瑛奈「with」
三倉類太「もののあはれ」
米良尚泰「female desire」

◉平成22年度 大学院映像芸術専攻修了制作・論文展

平成22年度の大学院映像芸術専攻（写真分野）修了制作・論文展が、江古田校舎芸術資料館において4月8日から26日まで開催されます。

◉平成22年度 卒業・修了制作優秀作品展

平成22年度の写真学科卒業制作の中から下記の優秀作品を江古田校舎東棟写真ギャラリーで5月から順次展示します。

○芸術学部長賞
安東沙希「惑星」／佐々木 龍「童唄」
中津川瑛奈「with」／柳岡創平「共存共栄」
章 岱「Talking it Over」
○金丸重嶺賞
三井春樹「PROTO TYPE」／今給黎香里「逢いたい」
森田佳奈「家族の肖像」
○芸術学部奨励賞
林 珍元「Utopia、Dystopia」

◉オリジナルプリント展開催

写真学科のオリジナルプリントコレクションの中から、優れた黒白の写真作品を展示するオリジナルプリント展「アメリカの写真家による人と風景」が、東京写真月間2011の協賛展として5月16日から6月10日まで江古田校舎芸術資料館において開催されます。

映画学科

○公益社団法人映像文化製作者連盟「映文連アワード2010」パーソナル・コミュニケーション部門において、映画学科平成21年度卒業制作『いふうなぁ』が部門優秀賞を受賞しました。
○関西テレビ主催の映像コンテスト「BACA-JA 2010」映像コンテンツ部門において、映画学科平成21年度卒業計画映像制作作品『老いてなお、生きる』（田中美音さん）が優秀賞を受賞しました。
○「ASK？映像祭2010」コンペティション部門において映画学科平成21年度卒業計画映像制作作品『モーフ』（井川文恵さん）が入賞しました。
○3月5日、6日の両日に映像コース3・4年生有志による作品上映会が江古田校舎東棟EB-1教室で開催されました。平成22年度の卒業計画と映像Ⅲの授業内で制作されたアニメーション、ビデオ・アート、ドキュメンタリー、ドラマなど様々な作品24本が上映されました。同時に隣のEB-2教室では4年生の報告論文の展示・閲覧が行われました。
○平成22年度卒業制作（監督、撮影・録音、演技）は、16mmフィルム作品10本、35mm劇場用フィルム作品1本、ビデオ作品19本の計30本が制作されました。これらの作品は、「映画演出Ⅲ、映画技術Ⅲ」の作品と併せて「Focus In 2011」（6月中旬頃開催予定）で上映されます。
○「映画演出Ⅲ」「映画技術Ⅲ」課題作品、「映像Ⅲ」課題制作作品、「卒業計画」映像制作作品、「卒業制作」作品が、J:COMMUNITYのJ:COMチャンネルにて放映されます。「日藝アワー」4月第3週から毎土曜日・日曜日（18:00～）放送予定です。

美術学科

◉展覧会等のお知らせ

○冨井大裕助教作品展示
・MOTアニュアル2011 Nearest Faraway ── 世界の深さのはかり方
2月26日～5月8日 東京都現代美術館
・『色と形をならべる』
3月4日～26日 ラディウム ── レントゲンヴェルケ
（日・月・祝休 開廊時間：11:00～19:00）
○美術学科絵画コース版画専攻卒業生による展示
6月10日～7月31日 星と森の詩美術館（新潟県十日町市）
○N＋N展2011
6月21日～7月3日 練馬美術館
現役教員、旧教員、日藝コレクションから出展

◉第62回 十日町市雪まつり 地元新聞社賞受賞

今年で7回目の参加となる彫刻コース有志27名に写真学科の田中里実助教と学生4名が参加。例年よりも多い雪に恵まれ、「風神・雷神・七福神」をテーマに高さ6m、横12mの雪像を制作しました。

音楽学科

◉演奏会のお知らせ

○平成22年度卒業演奏会
3月23日 18:00開演 練馬文化センター小ホール
ピアノ独奏：横川千秋、荻野祐子、井上絢菜
ソプラノ独唱：堤 千佳、作田佳奈美
フルート独奏：川野里紗 ホルン独奏：相原 結
ユーフォニウム独奏：渡辺美穂
トロンボーン独奏：亀井美香
バストロンボーン独奏：丸田和輝
打楽器独奏：齋藤康成
ピアノ独奏：中村かおり、小川彰吾、藤山瑠衣
作品発表：佐々木正暁、ピアノ独奏：原 久美子
トロンボーン独奏：臼田克巳 ソプラノ独唱：青木友花
○卒業論文要旨発表会
3月23日 14:00～ 江古田校舎音楽小ホール
磯部瑛世、原田明日香、下山絵吏、吉田沙織、
杉山晃一、渡邉瑠美、牟田高太郎、齋藤優輝

3月23日に予定されていた、平成22年度卒業演奏会及び卒業論文要旨発表会は東北地方太平洋沖地震のため中止となりました。

○日本ピアノ調律師協会 第12回新人演奏会
4月30日 17:00～ 東京文化会館小ホール 原 久美子
○ムラマツフルートデビューリサイタル
日時未定 川野里紗
○第81回読売新人演奏会
東京文化会館大ホール 両日とも11:00開演
5月3日・作品発表：佐々木正暁
Tb 亀井美香、Pf 藤山瑠衣
・バストロンボーン独奏：丸田和輝 Pf 小川彰吾
5月4日・ピアノ独奏：原 久美子
・ソプラノ独唱：青木友花 Pf 中村かおり
○ヤマハ管楽器新人演奏会
ヤマハホール 18:00開演
5月18日 フルート独奏：川野里紗
5月19日 トロンボーン独奏：臼田克巳

文芸学科

◉小泉典子さんが第9回 江古田文学賞を受賞

第9回江古田文学賞は、平成22年8月31日に応募を締め切り、約100篇の作品が集まりました。その中から14篇が2次審査を通過し、8篇が最終審査に残りました。10月23日、江古田校舎で行われた最終選考会にて『カランパウの首輪』『やすらぎの家』『鉄工場チャンネル』の3篇が最終候補作となり、選考の末、小泉典子さん（3年）の『鉄工場チャンネル』が江古田文学賞に選出されました。

◉ノベル大賞佳作を受賞

（株）集英社コバルト編集部が主催するノベル大賞において、御永真幸さん（3年）の応募作『ただここに降りしきるもの』が2010年度ノベル大賞佳作を受賞しました。同賞は集英社が刊行するライトノベル系文芸誌『Cobalt』及びコバルト文庫の読者を対象とした作品を公募する文学賞で、1983年の募集開始以来、唯川 恵、藤本ひとみ、山本文緒といったライトノベルだけではなく、一般小説の分野においても現在活躍している作家を多数輩出している実績ある文学賞です。今回656編の応募作の中から最終候補作6篇に選出、選考委員の大岡 玲、桑原水菜、橋本 紡、三浦しをん、吉田玲子（50音順）各氏による厳正な選考の結果、見事に佳作（656人中2位）入賞を果たしました。

◉第10回 湯河原文学賞を受賞

湯河原文学賞実行委員会が主催する第10回湯河原文学賞小説の部において、細井麻奈美さん（2年）の『カメラ』が最優秀賞を受賞しました。作品は、『祥伝社 小説NON 6月号（5月21日発売）』に掲載されます。

演劇学科

新年度のスタートと同時に演劇学科の企画や実習発表が始まります。
4月29日から5月1日に北棟中ホールで串田和美特任教授演出による『与三郎』（仮題）が上演されます。学内外の出演者、スタッフによる公演です。詳しくは演劇学科ホームページをご覧ください。
このほか、前期の実習発表公演は以下の予定です。
○舞台総合実習ⅢA（演劇）
7月1日～3日 江古田校舎北棟中ホール
○舞台総合実習ⅢC（日舞）
7月9日 江古田校舎北棟中ホール
○舞台総合実習VD（洋舞）
7月15日～16日 江古田校舎北棟小ホール
○舞台総合実習ⅠA（演劇）
7月14日～16日 所沢校舎D棟実習室1
○舞台総合実習ⅠB（演劇）
8月4日～6日 所沢校舎D棟実習室1
現在演目は未定ですが、詳細は学科ホームページでご確認ください。http://www.art.nihon-u.ac.jp/theare/

放送学科

◉「国際ドラマフェスティバル in EKODA」開催

1月22日、江古田校舎E-207教室にて、第3回国際ドラマフェスティバル in EKODAが開催されました。第一部では、「国際ドラマフェスティバル in TOKYO 2010」で連続ドラマ優秀賞の『mother』から次屋 尚プロデューサーと脚本家の坂元裕二さんを迎え、ドラマへの想いを語っていただきました。第二部では、ニッポン放送会長の重村 一さんとNHKエンタープライズの河村正一さんを迎え、日本のドラマを海外に発信する戦略とその展望について、そして第三部では、連続ドラマグランプリ獲得の『JIN ―仁―』から石丸彰彦プロデューサーと演出担当の平川雄一朗さんを迎え、キャスティングや演出の方法などをうかがいました。入場制限がかかるほどの来場者が訪れ、会場は終日熱気に包まれました。

◉「脚本展」開催

江古田キャンパスリニューアル記念事業の一環として、1月21日～25日、放送学科の第2テレビスタジオにおいて「脚本展」が開催されました。展示されたのは、大河ドラマ・時代劇、刑事ドラマ、恋愛ドラマ、学園ドラマ、特撮ドラマ、アニメといったカテゴリーごとに歴史的名作から最新作までの脚本のほか、歌番組やバラエティ番組、情報・ドキュメンタリー番組の構成台本。4日間の期間中、特に22日は「国際ドラマフェスティバルin EKODA」が同時開催とあって、多くの来場者で賑わいました。

◉第23回 ACC学生CMコンクールで放送学科から2名受賞

CMの質的向上と人材の育成を目的に、全国の学生を対象として実施されているACC学生CMコンクールのラジオCM部門で、小島和俊さん（2年）と新倉沙織さん（2年）が、応募総数1、032作品の中からそれぞれ大賞と奨励賞を獲得しました。おめでとうございます。
受賞作品は、こちらで確認できます。 http://www.acc-cm.or.jp/festival/10gakusei/gakusei_result.html

◉春風亭一之輔さんが文化庁芸術祭賞新人賞

落語家の春風亭一之輔（平成13年放送学科卒・本名：川上隼一）さんが、「まちのゆめ・まちのこころ・まちのことば」落語会における古典落語「茶の湯」の話芸を高く評価され、平成22年度第65回文化庁芸術祭賞の新人賞（関東参加公演の部）を受賞しました。一之輔さんは、古典落語「初天神」でNHK新人演芸大賞落語部門グランプリも受賞していますが、両賞を同年度に受賞したのは史上初の快挙です。
その話芸を堪能したい方は、内幸町ホールで月一回開催している自主公演「真一文字の会」へどうぞ。
（http://www.ichinosuke-en.com/own.html）
また、JFN系列全国FM局でオンエアされている『SUNDAY FLICKERS』（毎週日曜日朝6時～8時30分）では、メインパーソナリティとして活躍中です。

デザイン学科

◉産学共同研究プロジェクトの成果をまとめた冊子が3月末に発行されました

平成22年度にインダストリアルデザイン（ID）コースの研究室が中心となって企業や団体と行った下記の産学共同研究プロジェクトの成果報告冊子が完成しました。
○「新しい価値を提供する次世代リストギアの開発」
カシオ計算機株式会社×ID研究室＋ID3年生14名
○「室内鑑賞植物用プランターのデザイン開発」
東京パック株式会社×ID研究室＋ID3年生8名
○「家庭用シーリングLED照明のデザイン開発」
エール電子株式会社×ID研究室＋ID2年生15名
○ちちぶ太白サツマイモ菓子のパッケージデザイン等の開発
財団法人秩父地域地場産業振興センター×ID研究室＋ID2年3名＋CD2年6名

◉よしもとおもしろ水族館とデザイン学科によるコラボレーション企画展のお知らせ

同館とデザイン学科のコラボレーション企画展が実現しました。博物学者の荒俣宏氏を本学に招いて企画検討を進め、展示計画、作品制作、広報プロモーションなど展覧会デザインを実践的に学ぶプロジェクトを実施。その成果を展観します。
『博物学者 荒俣 宏 探集 NO-UMA展 ～未確認生物はここで確認できる～』 3月19日～5月8日
よしもとおもしろ水族館（横浜中華街）にて
http://www.omoshirosuizokukan.com/

◉デザイン学科教員らによる展覧会のお知らせ

デザイン学科の桑原淳司教授、OBの田頭慎太郎さんらによる展覧会や芸術資料館収蔵のポスター展が江古田校舎のA&Dギャラリーにて下記により開催されます。
○『スイス ベルン自然史博物館のポスター展 ── アートディレクター／クロード・クーンの世界』（芸術資料館収蔵作品28点を展示） 4月5日～28日
○田頭慎太郎＋田置太一『CD卒業生2人展』
5月30日～6月18日
○桑原淳司『A Boy in My Mind』（幼少期における遊びと生活に関わる原体験からの考察） 6月20日～30日
○細谷 誠『インタラクションデザイン教育研究発表展』
7月29日～8月6日

◉コース別研修セミナーのお知らせ

コミュニケーションデザインコース（CD）、インダストリアルデザインコース（ID）、建築デザインコース（AD）の本年度の研修セミナーは次のとおりです。
【CDコース】
○2・3年生軽井沢セミナー
4月29日～5月1日 軽井沢研修所
【IDコース】
○工業デザインセミナー（1～4年生・大学院生）
6月16日～19日 軽井沢研修所
【ADコース】
○古建築研修（3年生）
4月29日～5月2日 京都（桂離宮、修学院離宮、角屋ほか）

College Administration Office

【事務局からのお知らせ】

◉平成23年度授業日程

在学生（2年以上）ガイダンス	4月6日（水）7日（木） 於：両校舎
平成23年度入学式〈全日大〉	4月8日（金） 於：日本武道館
※東北地方太平洋沖地震等のため取りやめ。	
芸術学部入学歓迎式	4月8日（金）午後 於：江古田校舎
新入生ガイダンス	4月9日（土）11日（月） 於：江古田校舎
新入生歓迎クラブガイダンス	4月12日（火）午後 於：所沢校舎
定期健康診断	4月12日（火）13日（水） 於：両校舎
前期授業開始	4月14日（木）
臨時休校	4月30日（土）5月2日（月）
新入生歓迎行事	5月21日（土）〈休講〉 於：所沢校舎
前期補講期間	7月11日（月）～16日（土）
※補講の実施を必要としない科目については、休講とする。	
中間試験・前期A試験	7月19日（火）～25日（月）〈授業内試験〉
※中間試験実施該当科目は外国語科目を主とする。なお、試験を実施しない科目は平常通り授業を行う。	
※前期試験実施該当科目は前期のみで授業を終了する科目とする。なお、試験を実施しない科目及びB試験該当科目は平常通り授業を行う。	
前期B試験	7月26日（火）～8月1日（月）
※所定の試験時間割にて試験を実施し、平常授業は行わない。	
夏期休暇	8月2日（火）～9月20日（火）
前期追・再試験	9月21日（水）・22日（木）・24日（土）
※前期追・再試験は前期終了科目の内、不合格となった卒業見込者のみを対象に行う。なお、平常授業は行わない。	
後期授業開始	9月26日（月）

◉新入生に対するクラブ勧誘

○新入生歓迎クラブガイダンス
所沢校舎（教室棟11番教室） 4月12日（火）13:00～17:00
参加部会：32部会（文化部連盟15部会、運動部連盟14部会、他3部会）
○新入生勧誘期間
江古田校舎（宣伝チラシ配布） 4月8日（金）13:00～16:00
4月9日（土）10:00～16:00
所沢校舎（机出し） 4月12日（火）～23日（土）10:40～16:00
（公認団体12日～23日、未公認団体18日～23日）
所沢校舎（円形ステージ） 4月14日（木）～28日（木）12:10～13:00
（公認団体14日～22日、未公認団体23日～28日）

◉平成22年度日本大学芸術学部奨学金第2種奨学生の決定について

平成22年度日本大学芸術学部奨学金第2種奨学生が次のとおり決定しましたので、お知らせします。本奨学金は芸術・文化に係る創作活動において、専攻分野に関連した国際的又は全国的規模のコンクール・発表等で高い評価を受ける等、優秀な成績をあげたと認められる学部・大学院生に対し、給付される奨学金です。

【学部】
河野梨沙（映画・4） ｜ 社団法人日本ポストプロダクション協会主催のJPPAアワード2010 ミクシングカテゴリーⅠ部門（ドラマ）でシルバー賞を受賞
木原浩太（演劇・4） ｜ 東京新聞主催の第67回全国舞踊コンクール（現代舞踊 第一部）において第1位（文部科学大臣賞・平岡斗南夫賞受賞）となった。また、その他の全国的規模のコンクールにおいても数々の賞を受賞
御永真幸（文芸・3） ｜ 株式会社集英社コバルト編集部が主催する2010年度ノベル大賞において応募作『ただここに降りしきるもの』が佳作を受賞
清水恭子（デザイン・3） ｜ 社団法人全日本シーエム放送連盟（ACC）主催の第23回ACC CM COMPETITION FOR STUDENTS（テレビCM部門）において大賞（第1位）受賞
【大学院】該当者なし （学年は22年度のもの）

江古田キャンパス整備事業寄付者の銘板が完成しました

ご寄付いただいた皆様のご厚志に感謝し、芸術学部の歴史にご芳名を残させていただきます。

このたび、これまでにご寄付をいただきました方のご芳名を末永く顕彰させていただくための銘板が、江古田校舎西棟1階「キャンパス整備記念ギャラリー」に設置されました。これもひとえに皆様方の温かいご支援の賜物と深く感謝しております。引き続き、重ねてのご支援をお願い申し上げます。

日本大学藝術学部江古田キャンパス整備事業 寄付者芳名簿

今号は平成22年10月1日から平成23年2月4日までにご寄付を頂戴した皆様のご芳名を以下に掲載させていただきました。ありがとうございました。

【在学生父母】青木欣治／内田正人／牧田晴一／三輪尚士 【教職員】池田武司／大谷尚子／立石重美／長瀬浩明 ── 以上8件（順不同・敬称略）

編集後記

AC022編集校正中に東北地方太平洋沖地震という近代日本が経験したことのない大規模地震が起こってしまいました。被害の全容も未だ明らかではありませんが、亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。この平成22年度は6年間の江古田校舎リニューアルが完了し、全面的に新キャンパスを使い始めた年となりました。図らずも地震の直前に新校舎が完成したことになります。再開発の委員としてプロジェクトに関わり始めた頃は、完成は約10年先というようなことでしたが、終わってみると時間が経つのは早いものです。さらに旧校舎の完成は1968年頃ですから、思えば鉄筋コンクリートの建造物も早く建て替えられてしまうものです。旧校舎は1930年代にバウハウスで学ばれた故山脇巌先生が設計されたものでした。私も学生時代から長く過ごしたので愛着がありましたが、バウハウスの影響をよく示した山脇デザインの建物として意識したのは後年になってからのことです。時々に立ち返るべき拠り所としての伝統が感じられる建物がなくなってしまったのは少し残念ですが、新校舎で推し進めていく教育の中で、芸術学部の良き伝統を未来の芸術創造を目指す若い人たちに伝えていければと考えるこの頃です。最後に、キャンパス再開発委員としても共に活動してきた原正人教授が1月19日に急逝しました。原正人さんの丁寧で正確な仕事にはいつも助けられていました。これからの写真学科／芸術学部にとって貴重な人材をなくしたのは大変に残念なことです。慎んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。 ── 編集委員 高橋則英

◉発行：日本大学芸術学部 ◉発行責任者：野田慶人
◉編集：広報委員会／委員長：佐藤洋二郎／副委員長：中町綾子／編集委員：高橋則英／宮崎正弘／鞍掛純一／土野研治／谷村順一／大久保恵児／金 龍郎／長瀬浩明／松本 洸／山内 淳／松村悦博／樋口 肇／秋山和則／鈴木俊崇 ◉ACロゴデザイン：中島安貴輝 ◉デザイン：井原靖章デザイン ◉印刷：㈱タスプ／箭内民生 発行2011.4